

知識探訪

多民族社会の横顔を読む

協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

マレーシアのヒンドゥー寺院建設をめぐる問題

古賀万由里 (開智国際大学リベラルアーツ学部講師)

英領時代のマレーシアでは、インドのタミル地方から来た移民がエステートで、ラバータッピングなどの仕事に携わっていた。当時、イギリス政府は彼らのために、ヒンドゥー寺院を建てることを許可したため、インド人コミュニティの住居に隣接した場所に、小さな寺院が数多く建てられた。独立後、エステートを離れて町に働きに出てくるようになると、彼らは新しい居住地にも礼拝の場を求め、寺院を建設しようとした。また、かつてエステートであった場所が、町となり、住宅地や商店、工場などが建てられるようになった。

そこで生じているのは、寺院を取り壊して商業ビルや住居を建てようとするデベロッパーと、それに反対する住民との衝突である。政府は寺院を、個人の土地または国やプミプトラのための土地に建てられた違法な建物であるとみなし、取り壊しを支持する。一方でインド系住民は、イギリス政府から認められて建てた寺院であるので、取り壊しに反対するか、移転地を要求する。

デベロッパーが与える移転地は、下水溝の脇のように、不要の土地であり、寺院を建てるにはふさわしくないため、インド系住民は反対するが、訴訟を起こしても寺院は取り壊されてしまうのだ。だが、寺院がうまく具合に再建される場合もある。

クアラルンプールの商業施設「ミッドバレー・メガモール」東側の駐車場の出入り口脇には、カラフルなヒンドゥー寺院がある。主神として祀られているのは、ムーガンピカ女神である。主神の脇には、菩提樹の木があるが、元々は正面のハイウェイの反対側にあった。メガモールが建設される前、この場所にコンドミニアムを建てようとした中国人がいた。菩提樹の木を切ろうとしたところ、木から水が3か月間流れ続けた。神の涙だといって、インド系住民はそれを飲んで癒された。

デベロッパーの中国人は破産し、その後に来たミッドバレーは、寺院の土地を売るように所有者に要求した。だが、3代目の所有者である女性はトランスに入り、寺院はここにあるべきだと言った。中国人エンジニアは夢の中で、菩提樹の木を一部とって、移動するようというお告げを得た。ミッドバレーは寺院の再建を援助し、モールに隣接した寺院が建設された。



ミッドバレーに隣接するヒンドゥー寺院 (筆者撮影)

その他、プタリンジャヤにある寺院では、中国系デベロッパーが寺院の近くで蛇を殺したために、機械が止まって工事が中断し、インド系女性がトランスに入って蛇を殺した中国人を非難したという。またクランでは、エステートに建てた寺院を、下水溝近くに移すように言われたが、寺院関係者らは反対し、近くの土地を獲得した。寺院再建の際に、3匹の蛇が現れ、祠の移転を確認しに来たなど、不思議な話が聞かれる。寺院は取り壊されてもヒンドゥー神は住処を獲得する。まるで、抑圧されながらも自文化を守ろうとするインド系住民のようである。

< 筆者紹介 >

1972年東京生まれ。慶應義塾大学社会学研究科で博士(社会学)を取得。専門は文化人類学で、南インドとマレーシアで、インドの宗教文化と芸能を中心に研究している。主な論文は “The Politics of Ritual and Art in Kerala: Controversies Concerning the Staging of Teyyam” Journal of the Japanese Association for South Asian Studies 2003, No.15.